

先日、幼い子どもが「パパとママがつかまえよう」と笑顔で話しかけてくれました。「なにをつかまえよう?」と問い返してみました。「びかちゅう」との答えを聞いて苦笑いの自分。いつからか家庭にも入り込んだスマホのゲーム。子ども達の遊びのかたちは変化しています。

その豊かな変化の陰に、昔から変わらず存在している問題が、子どもの貧困です。その現状を少しでも打開しようと、人権教育学習会などに積極的に参加し、半世紀以上にわたり勉強を続ける人がいます。「どうして学び続けるのですか?」の問いかけに、彼は中学時代を振り返り話してくれました。幼い頃から仲良しだった彼の同級生は、見た目には彼と変わりませんでした。しかし、高校へ進学する同級生が「自分とは別の人間」に思えてならなかったと言います。

一方、彼は集団就職で都会へ出ました。「自分もできることなら同級生と共にもう少し勉強をしたい」「部活動に打ち込んで充実した高校生活というものを経験してみなかった」そう思った時、それは貧困格差に気づいた瞬間でもありました。故郷を離れる時、彼は教育を受けることができれば、このやるせない感情を変えられることができるのではないかと思い、昼間

豊かさの陰に

は働き、夜は学校に通うことになりました。勉強することは楽しく、知識の広がり、自分をもっと豊かにしてくれるような気がしたそうです。故郷に戻った彼は学ぶ意欲を忘れることはありませんでした。学ぶ価値を伝えたい。そして差別を無くすための活動がしたいという思いが、現在も勉強会への参加に繋がっていると言います。

あるホットラインには、子どもの学費や生活費をめぐる多様な相談が寄せられています。格差社会と呼ばれて久しい日本において子どもの貧困は深刻であり、放置できない問題として存在しています。

彼のように、貧困と呼ばれる状況に身を置く子ども達に代わって格差社会に疑問を投げかけ、学びの価値を伝えることが、教育の質を深めることへと繋がるのではないのでしょうか。

*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569